2018 オフィシャル ソフトボール ルール改正点

2017 オフィシャル ルール

1－65項　ストライク ゾーン STRIKE ZONEとは、打者が打撃をしようとするときの脇の下と膝頭の上部の間の、本塁の上方空間をいう。

1－66項　タッグ TAG(タッチ) とは、野手が手、またはグラブで球を確捕して、身体の一部を塁に触れたり、確捕した球または球を確捕したグラブで走者に触れる行為をいう。

P21

※ルール改正の理由・趣旨
国際ルールが改正されたことに伴い、それに合致する内容に修正を行った

2．ユニフォームナンバー　P38

ユニフォームナンバーは、背中と胸下につける。
監督は30、コーチは31・32、主将は10、他のプレイヤーは1から99までの番号とする。

2018 オフィシャル ルール

1－65項　ストライク ゾーン STRIKE ZONEとは、打者が自然に構えたとき（スイングする前）の「みぞおち」（上限）と「膝の皿の底部」（下限）の間の、本塁上の上方空間をいう。（※詳細はR7－4項ストライクを参照のこと）

(注1)　高低においては、球の最上部（トップ）が上限に接するか、それより下を通過すれば「ストライク」である。また、球の最下部（底部）が下限に接するか、それより上を通過すれば「ストライク」である。

(注2)　内・外角は、ホームプレートを上から見た状態で、ホームプレートに球が接すれば（球がホームプレート上にかかっていなくても）「ストライク」である。

(注3)　ホームプレート上に想定される５角柱の空間のどこかを球が通過すれば「ストライク」である。

P21

2．ユニフォームナンバー（UN／UNIFORM NUMBER）
ユニフォームナンバーは、背中と胸下につける。
監督は30、コーチは31・32、主将は10、他のプレイヤーは1から99までの番号とする。

P40

※ルール改正の理由・趣旨
記録委員会からの指摘により、ルールにユニフォームナンバーの略号に関する説明がなかったため、指名選手（DP／DEGSIGNATED PLAYER）と同様の形で、ユニフォームナンバー（UN／UNIFORM NUMBER)の表記を追加した

4－8項　プレイヤーのマナー　P47

1．チームのメンバーは、審判員の判定に対し、不服の言動や不満の態度を示してはならない。
2．チームのメンバーは、競技施設内（ベンチを含む）で喫煙をしてはならない。（競技施設内では指定された場所以外で喫煙してはならない）
3．攻撃側チームのメンバーは、試合中いかなるときも、故意に打者席のラインを消してはならない。

(注)　国際ルールでは、打者がラインを消した場合は、ボールデッドとなり、打者に対してワンストライクが宣告される。監督・コーチやプレイをしていない攻撃側のメンバーがラインを消した場合には、次の打順のプレイヤーに対してワンストライクが宣告される。

※ルール改正の理由・趣旨
すでに国際大会では実施・運用されているルールであり、2017年のルールブック発行時に「国際ルールの改正がなければ完全実施」の予告通り、本年から〈効果〉を適用することになった

4－8項　プレイヤーのマナー　P49

1．チームのメンバーは、審判員の判定に対し、不服の言動や不満の態度を示してはならない。
2．チームのメンバーは、競技施設内（ベンチを含む）で喫煙をしてはならない。（競技施設内では指定された場所以外で喫煙してはならない）
3．攻撃側チームのメンバーは、試合中いかなるときも、故意に打者席のラインを消してはならない。

〈効果〉 3
(1)　ボールデッド。
(2)　打者に対してワンストライクが宣告される。

(注)　次の打者が打席に入る前や選手交代時に、監督・コーチや攻撃側のメンバーがラインを消した場合には、次の打順のプレイヤーに対してワンストライクが宣告される。

6－1項　投球の準備　P57

1．投手は球を持たないで、投手板上またはその付近で投球姿勢をとってはならない。
2．捕手が捕手席内にいないときは、投手は投球位置にいるとはみなさない。
3．投手板を踏むときは、必ず両手を離して両足を投手板に触れていなければならない。
　そのとき、一塁と三塁を結んだ線に両腰を合わせる。
4．捕手のサインを見るときは、投手板上で両手を離して、グラブあるいは投球する手に球を保持しなければならない。
5．投球動作に入るときは、身体の前または横で球を両手で持ち、２秒以上、５秒以内身体を完全に停止しなければならない。

※ルール改正の理由・趣旨
国際ルールが改正されたことに伴い、それに合致にする内容に修正を行った

6－1項　投球の準備　P59

1．投手は球を持たないで、投手板上またはその付近で投球姿勢をとってはならない。
2．捕手が捕手席内にいないときは、投手は投球位置にいるとはみなさない。
3．投手板を踏むときは、必ず両手を離して、軸足を投手板に触れておかなければならない。

(注)　両足を投手板に触れておくか、軸足を投手板に触れながら自由足を後方（投手板の両端の後方延長線内）に置くことができる。
　そのとき、一塁と三塁を結んだ線に両腰を合わせる。

4．捕手のサインを見るときは、投手板上で両手を離して、グラブあるいは投球する手に球を保持しなければならない。
5．投球動作に入るときは、身体の前または横で球を両手で持ち、両足を投手板に触れている状態、もしくは軸足を投手板に触れながら自由足を後方に置いた状態で、２秒以上、５秒以内身体を完全に停止しなければならない。

＊(注)　完全停止後、自由足を投手板から後方に引いたり、あらかじめ後方に置いていた自由足をさらに後方に引いた場合は不正投球となる。

2018 オフィシャル ソフトボール ルール改正点

2017 オフィシャル ルール

6－7項　塁への送球 P61

1．投手はボールインプレイ中に、投球姿勢をとったのち、足を投手板に触れたまま塁に送球してはならない。

2．投手が投手板を外すことのできる場合は次の通りである。

(1)　走者が塁を離れているとき。

(2)　打者が打者席を出たとき。

(3)　アピールプレイをしようとしたとき。

(注)　投手が投手板を外すときは、両手を離す前に、両足を投手板の後方に外さなければならない。

3．打者は、試合中いかなるときも、故意に打者席のラインを消してはならない。 P68

(注)　国際ルールでは、打者がラインを消した場合は、ボールデッドとなり、打者に対してワンストライクが宣告される。また、監督・コーチやプレイをしていない攻撃側のメンバーがラインを消した場合には、次の打順のプレイヤーに対してワンストライクが宣告される。

4．打者は、投球間にサインの確認や素振りをするとき、打者席内に片足を置いておかなければならない。

【例外】

(1)　フェア、ファウルに関わらず、打者が投球を打ったとき。

(2)　スイングしたとき。あるいはスイングを試みたとき（チェックスイングを含む）。

(3)　投球を避けるため、打者席を出ざるを得なかったとき。

(4)　ワイルドピッチやパスボールがあったとき。

(5)　本塁上でプレイが行われたとき。

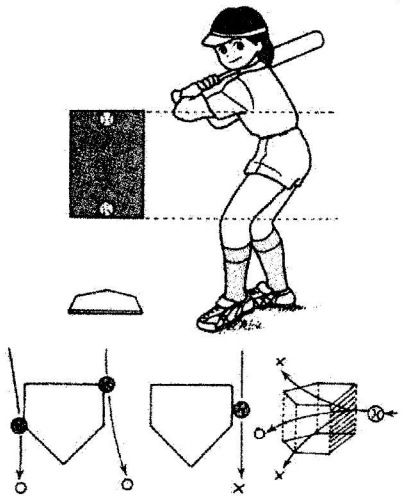
(6)　タイムが宣告されたとき。

(7)　投手がピッチャーズサークルを離れたとき。または、捕手が捕手席を離れたとき。

(注)　国際ルールでは、打者が【例外】の場合を除き、打者席から両足を外した場合、打者に対してワンストライクが宣告される。

7－4項　ストライク P69

1．正しい投球が地面につく前にストライクゾーンを通過したとき。



（○はストライク、×はボールを示す）

2018 オフィシャル ルール

※ルール改正の理由・趣旨

R6－1項「投球の準備」の改正に伴い、アピールプレイの際の投手板の外し方も「両足」ではなく（両足が触れている場合もあるが、自由足を後方に置くことが認められたので）、「足を投手板の後方に外す」とした

(3)　アピールプレイをしようとしたとき。 P64

(注)　投手が投手板を外すときは、両手を離す前に、足を投手板の後方に外さなければならない。

3．打者は、試合中いかなるときも、故意に打者席のラインを消してはならない。

〈効果〉 3

(1)　ボールデッド。

(2)　打者に対してワンストライクが宣告される。

(注)　次の打者が打席に入る前や選手交代時に、監督・コーチや攻撃側のメンバーがラインを消した場合には、次の打順のプレイヤーに対してワンストライクが宣告される。

4．打者は、投球間にサインの確認や素振りをするとき、打者席内に片足を置いておかなければならない。

〈効果〉 4

(1)　ボールデッド。

(2)　打者に対してワンストライクが宣告される。

【例外】

(1)　フェア、ファウルに関わらず、打者が投球を打ったとき。

(2)　スイングしたとき。あるいはスイングを試みたとき（チェックスイングを含む）。

(3)　投球を避けるため、打者席を出ざるを得なかったとき。

(4)　ワイルドピッチやパスボールがあったとき。

(5)　本塁上でプレイが行われたとき。

(6)　タイムが宣告されたとき。

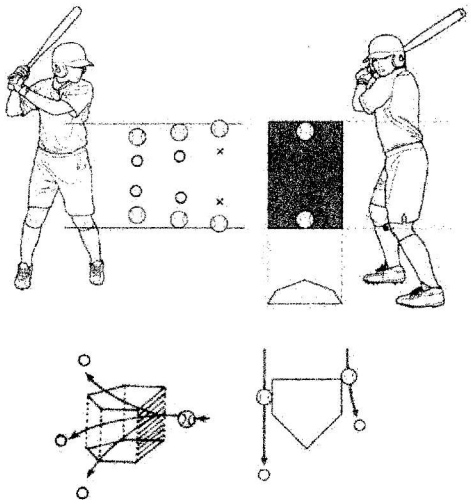
(7)　投手がピッチャーズサークルを離れたとき。または、捕手が捕手席を離れたとき。 P72

※ルール改正の理由・趣旨

R7－3項「打撃姿勢」3～4はすでに国際大会では実施・運用されているルールであり、R4－8項3と同様に「完全実施」の予告通り、本年から〈効果〉を適用することになった

7－4項　ストライク P73

1．正しい投球が地面につく前にストライクゾーンを通過したとき。



※ルール改正の理由・趣旨　国際ルールが改正されたことに伴い、それをイラストで図示した

2018 オフィシャル ソフトボール ルール改正点

2017 オフィシャル ルール

(注) 「ストライクゾーン」は、打者が打撃をしようとするときの脇の下と膝頭の上部の間の本塁の上方空間である。 P69

2018 オフィシャル ルール

(注1) 「ストライクゾーン」とは、打者が自然に構えたとき（スイングする前）の「みぞおち」（上限）と「膝の皿の底部」（下限）の間の本塁上の上方空間をいう。 P73

(注2) 高低においては、球の最上部（トップ）が上限に接するか、それより下を通過すれば「ストライク」である。また、球の最下部（底部）が下限に接するか、それより上を通過すれば「ストライク」である。

(注3) 内・外角は、ホームプレートを上から見た状態で、ホームプレートに球が接すれば（球がホームプレート上にかかっていなくても）「ストライク」である。 P74

(注4) ホームプレート上に想定される５角柱の空間のどこかを球が通過すれば「ストライク」である。

※ルール改正の理由・趣旨
国際ルールが改正されたことに伴い、それに合致する内容に修正を行った

10. 打者が投手の両足が投手板に触れたのち、反対側の打者席に移ったとき。 P73

10. 打者が投手の軸足が投手板に触れたのち、反対側の打者席に移ったとき。 P77

※ルール改正の理由・趣旨　R6－1項「投球の準備」の改正に伴い、「両足」を「軸足」に修正

24. 送球がブロックされたりオーバースローになったとき。 P100

24. 送球やフェアの打球がブロックされたりオーバースローになったとき。 P104

※ルール改正の理由・趣旨
R9－1項「ボールデッド」24をR3－6項「用具の放置」に対象を合わせ、「フェアの打球」を追加した

2018 競技者必携 修正点

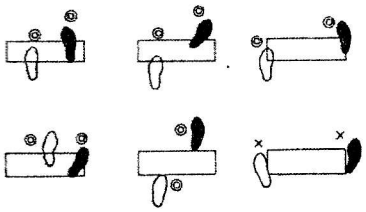
2017 競技者必携

P120

〔右投げ投手〕

自由足　軸足　◎ 合法　× 不正

【踏み方】



(注) 自由足・軸足とも、両足が投手板に触れていれば、合法的な投手板の踏み方である。
ただし、足が投手板の側面だけに触れている場合は投手板に触れているとはみなさない。

図1のように自由足がバックステップして、投手板から離れると不正投球になる。ただし、一連の投球動作の中で、つま先が浮いて投手板から離れても、投球開始時と踵の位置が変わらなければ、合法的な投球動作であり、不正投球とはみなさない。

【踏み出し方】

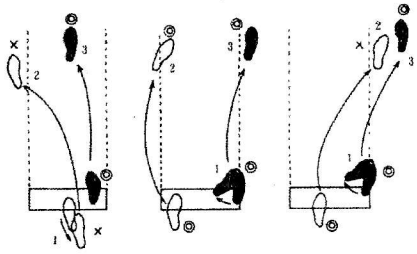


図1　図2　図3

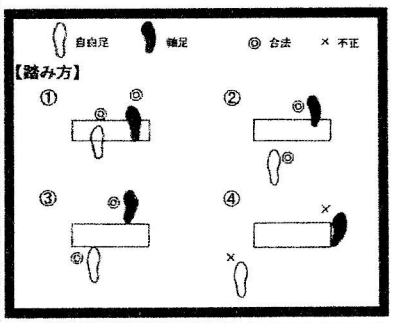
図3のように軸足の踵が一連の投球動作の中で投手板から離れても、つま先の位置が投球開始時と変わっていなければ（つま先が前方に移動していなければ）、合法的な投球動作であり、不正投球とはみなさない。

2018 競技者必携

〔右投げ投手〕

自由足　軸足　◎ 合法　× 不正

【踏み方】



(注) 自由足・軸足とも、両足が投手板に触れているか、軸足を投手板に触れながら、自由足を後方に置くのは合法的な投手板の踏み方である。
ただし、左図④のように軸足が投手板の側面だけに触れている場合は投手板に触れているとはみなさない。
また、自由足を投手板の後方に置く場合は、投手板の両端の後方延長線内に置かなければならない。

上図②、下図（図1）のように自由足が投手板から離れていても不正投球にはならない。また、一連の投球動作の中で、つま先が浮いて投手板から離れても、投球開始時と踵の位置が変わらなければ、合法的な投球動作であり、不正投球とはみなさない。

【踏み出し方】

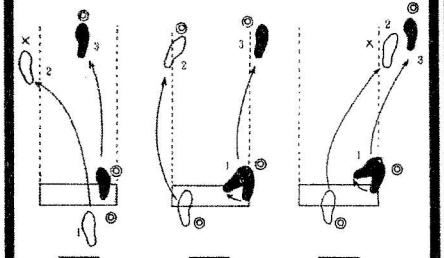


図1　図2　図3

図3のように軸足の踵が一連の投球動作の中で投手板から離れても、つま先の位置が投球開始時と変わっていなければ（つま先が前方に移動していなければ）、合法的な投球動作であり、不正投球とはみなさない。

P120

※修正理由　R6−1項3及び5のルール改正に伴い、イラスト及び解説文を改正されたルールに合わせ、修正した

2017 競技者必携

P121

10. 投手板の踏み方・踏み出し方

図1

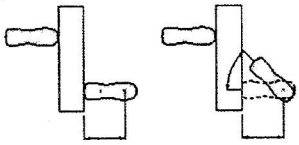


図1　投手板に両足が触れ、正しくセットしており、軸足のつま先の位置が投球開始時と変わらなければ、その後の一連の投球動作の中で踵が投手板から離れても不正投球とはみなさない。

図2

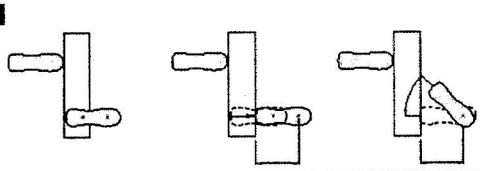


図2　投手板に両足が触れ、正しくセットしており、軸足が投手板の上を前方にスライドしても合法的な投球動作である。また、軸足のつま先の位置がスライドさせた地点と変わらなければ、その後の一連の投球動作の中で踵が投手板から離れても不正投球とはみなさない。

図3

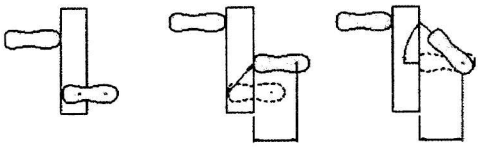


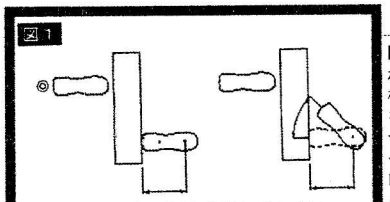
図3　投手板に両足が触れ、正しくセットしており、軸足が投手板の上を斜めにスライドしても合法的な投球動作である。また、軸足のつま先の位置がスライドさせた地点と変わらなければ、その後の一連の投球動作の中で踵が投手板から離れても不正投球とはみなさない。

2018 競技者必携

P121

10. 投手板の踏み方・踏み出し方

図1



自由足は投手板から離してもよい
(※投手板の両端の後方延長線内)

図1　投手板に両足が触れ、もしくは軸足を投手板に触れながら、自由足を後方に置き、正しくセットしており、軸足のつま先の位置が投球開始時と変わらなければ、その後の一連の投球動作の

図2

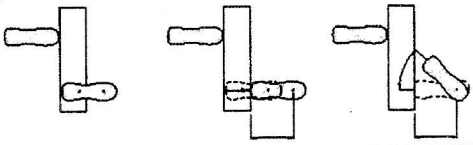


図2　投手板に両足が触れ、もしくは軸足を投手板に触れながら、自由足を後方に置き、正しくセットしており、軸足が投手板の上を前方にスライドしても合法的な投球動作である。また、軸足のつま先の位置がスライドさせた地点と変わらなければ、その後の一連の投球動作の中で踵が投手板から離れても不正投球とはみなさない。

図3

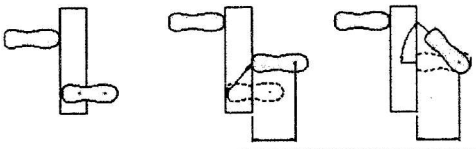


図3　投手板に両足が触れ、もしくは軸足を投手板に触れながら、自由足を後方に置き、正しくセットしており、軸足が投手板の上を斜めにスライドしても合法的な投球動作である。また、軸足のつま先の位置がスライドさせた地点と変わらなければ、その後の一連の投球動作の中で踵が投手板から離れても不正投球とはみなさない。

※修正理由　R6−1項3及び5のルール改正に伴い、イラスト及び解説文を改正されたルールに合わせ、修正した